



新六歌仙
宝曆四年
全

5
2214



門入封
號 2.214



李井庵存義
須臾庵祇丞
獨步庵買明
木樨庵樓川
獅子眠雞口
式棒庵由林

藤野潔氏遺愛之記



明治三十四年四月廿四日
藤野潔氏書



後京信々圖摸寫

新刊

西國

良經

むし誰かおさくれ
おれんしより暇を
えの山となす



今之亦むし母なるんさく苗
書新紀念子我旅草
いしりきやき記堂と鳥賊和て

門上の障子乃様かるみりり
稲書新大地へ落る蝕のあま
鹿也我を新萩原の約

存義

ウ
年妻を思ふかみ乃小智持
い^膽や吞つらんめくる免く酒
祝も火より比母来子り孝
わ水のこえこも君越さるる
松風母ついで病状教りまめ
庚申塚子驚きつるなり
君り代や金じふてを愛りけ
酒走のうち母らやかきしそ



いきこへて車二輛乃のやと
文ハむより里とくせん昔冠者
月むみ川越へぬも衣の裾
芝平志がみの赤記りも
唯^十唯^印唯^卯の雛子があこ城運ぶ智恵をえて
木の川母死るぬを人の面
阿字觀子幾長に僧のうちも寐は
麦搦比と音形一の山

卯如花の言也心重し哉嘆きみ
歩き舞うま如かひさし母成る
涙色淋もさうたかきぬ泪川
兜片手子くるる土黒
欄母の消寸ましくおのきく
月と影いのお流るみやう
さへ渡り紙も巻くしぬ秋の麻
ことごとく結成荷ふ商人

わがうぶ心さうしんくまの秋の海 某師
紫胡畑の酒中 夢 紫菀
目有らば、初夕終の煙くふ
あまと嘆かて物買中やる
待ぬ日かさうくと来る花の空
掃きしてあま庭の阿そり

蕪園

深山路やいづ

秋のい路あるん

ささりしき乃

夕ぐれ也心亭

深山の路やいづ秋のい路あるん
夕ぐれ也心亭

深山路やいづ秋のい路あるん 祇丞

月のおもひはる枝も葉も子

つさゆの路もたはる風もあそ

りふのそ目もあそなりもあそ

非冬儀の浅く住もはる菽園

おちりくと清ハハ梅苑

ウ
驛の火のあゝきく海五月園
文の言さきも一乃の学通
管膳の百尋夢越きり足母
雪を清りて指し庭石
松より師老の月子争色をみ
我は繕めしとて君
記念の夢梅及魂食と大なり
あられいくき嘆哉のかり位

夢も山とほふいと自負猪
初旅人の連母あまし
お借すし管へん祇よたふの比
塚の上あゝき居中遠せり
三月酒田おき居るはこ世
おちつうなり也実方の事
おまゝし難本おまゝむしう雀
神をいりて聖なる縁日

何とせんたのつゝ方姑他を籠
かゝ獨母かゝこゆりてあ
そこまと長舟一箇の白い来て
とちり付まのなまきり空
堤者ゝ子母負と使を渡習い
廣葉を敷て餅子あまつ
月の為竹の欄うちけり
まら母かゝふ萩の起り

風隨者のよなる思きりきり
油草つみ母袋を捨り
初日の後きこゆまの壁隣
葉をがらりと滑稽哉や
群集きる花母白衣の頭カウの殿
弱の満といやよいのや後

後成

宵少いさみの

まじりた

うつわれて

月子みゆる

あふれかゝる

貫明

かく山や月研を傳す宵子言
いさ音絶へく天下之れ冬
中成着て坐禪石を夕くれば
龍眼肉乃肉なりけり乃言
きみされききみされてや小雷
あふりけし我徒よ古池

揚弓坊弓のあきまる世姑をうら
祝母かくれえ日くくくく
音空く啼ぬくく寸まゆと
竹書を脊負ふて上る石坂
難行を名母和まきくみゆ程也
月とまといはぬ衣うつなり
り地城時きみ子お中秋
糸掛ゆひくく紅糸糸

いやくいお城詠るお侍
さすゝ魚所の屋乃語里
鯛のめ花くくくとききりて
あきそのまきくくくきり
羽虫扱く鶯色も雨女隅田川
久しうあく驟向あそい寸
そ海くと首利うきうにきりかき
罪も報となし旅籠答ふ

まつちろく素良姑都のそお本
北とハ初のはくき付るを
道灌ハ聖姑軍子 机
漸あつく又自み蘭姑魚
逢ぬあきころ姑自もり逢ぬ
龍籠通く急津のこりり
網崎みあられきこいの籠いり
くたの細乃人たまつく

この比乃言きの種を玉妻
去年十月とともか記杜史魚
幸名の幾代経あらん一構
誥守乃志ハ舅師一り
飛ふくはくしう姑むく燕
物みきりし善るまの目

西行

手ふいてはる

紙屋と

おのいきや

のちたる

さやのまうや

三つがしほのほれはる

紙屋福吟

紙屋とふらきやる西行忌

樓川

いのちまるらりり 穴紙ゆる蛇

戸漳子かや一回のお葉集り来て

たぬいなるはふり籠表紙所

賜の酒みきりた酒持自

舟さへるる菰のふそり

7
 彬成初る毘掛る寸御小屋
 里如常と贄馳へるより
 烏帽子着る智為連母仰れて
 朽して糸可く蘇の神の意
 草狩のふれを告まら夕暮
 洞如常河乃縁日の自
 稲書の世母衆の死ぬるを
 三くせ隔つる主成知る犬

〴〵くとあふは始相かきり
 矢社成花の核老あき
 去る母僕るむく物浩
 庭子の盆其も白ふ色
 +
 又了く山ハ曾根右師首相次郎
 あく言をれく十月の夏
 権勢成捨てむすへる弟の庵
 男を鬼と詠かきさむや

弓杖子鹿うち紫まじりき世
悪き海とけし舟あゝ
角如糲摺れと啼く菽垣子
毛也哉とけし弱牽如圖
ハ節や月如照已降賭とて
梅おろけけの意白ふ蘭
鳳鞞子孝ある民を養をさり
禮と提子かろた 並産

古寺の碁子さふす措の儀
いつ、名子なる流の夕阿
茶の雲松を梅もさうりり
海言哉とて歌張懸坊、奥
喜かき難の致句を和らき
又手ゆりしてさき子の旅

宮家

あけはまる秋の

なうむせ

ききぬー

かき月お

ききのこい

稻吟

新をききのき聖刺る負お月

鶏口

胸うち合ぬ秋名帷子

松言記根城梅城芳らめく

雪と見るまで鶴の舌お糞

柴漬の初鯉ねく表朝日お

推さき鼓うは林の揚簀戸

ウ
心ゆく余ふ葉乃の意味み挂絡ひて
新法語く 風 世の 燈
貝種子切なる中越さく 避 たる子
く 詩 姑一句子じく泣き泣く
何由へそ松舟れのかまくら
月のまらたある堂演るお
いとさくくおま 峰 えう海こ
母おく お 女とと藤張の弓

心と憂く火宅哉お一人の詠
きく 襖 姑めたき 母 きつ
都色も北日あはる 姑 正何化て
東風の吹消をめく 姑 明星
な く 振る は ぬ あ ら る は 籠子 啼
志 染 とき 我 祝 小 里 姑 棟上
誓 女 姑子の杖 な 子 こ こと 来 子 は り
我 母 倦く 日 姑 昼 色 夕 暮

中へ母をよと鳴の玉まじり
いつ種哉又も岩間田の稻
さやと葉外へきて蝕む月の音
たゆみし約忠はまつくときく
浮櫓の柱も草やなぬへた
く茶師さきへ見えたる人教書に居る
長唄ハ梅のさきあき卦もきく
空に往くぬふ山流の真

さびしき母地をうけて賽如神
糊ういゝる布子ぬくれつ
米のま大津袋も猫忠を
まのつゝる字如半部
舟おとく陰枝花より紅葉を梨
いとせめていひけりた忠

家隆

の

かたの

の

の

片

の

の

の

の

福吟

空の成りけり人の豆

由林

さむくもるをくれを返す

濱の赤魚の面は濃き出く

茶壺かきかたはえり家

梅の葉初の花月根は深す

まやもち止ぬ謎歩りく

う
 多井より内ハ吉首の祇園夏
 料理の癖成りけりけりアモ此
 街不慮に子方なうて志ざりなり
 隣忠寺如浄成 驚く
 池より新日成蓮のかきさき
 口説くと通ふ 驚愕
 醒ぬ酒成に成浮氣と占ハ建
 信とうり能く借歩乃測

是音に戸はめし成よく美如庵
 花火如場所子燈語成えとつる
 月々暈成る暑さ如とむみりと
 秋子漸をらり業へ〜産
 獨して去法きふらんあさよ
 堅に控乃松伐〜勢山
 奥如間〜居風昌仕とふり名成
 あどあふのお女島成買

唐音成符咄みふも悉るん
手なうつましめ成就する宮
又もせはも他富葱はくけ
友もふちとら沖多暮れぬま
麻衣むきふに潜る袖たぬと
雲に志るく本箱せんあと
通る助西の店下音自衣
露はくくみ巻止の砂利

ひさきに書成よのむのかと使
知ぬてまこと懐旧乃餅
取出と袋み探る張懸乃汗
みな郎等好祈わく教るる
きく紙古花み通産のんえ
枝折開けハ舞よる 蝶

あはれに...
あはれに...
あはれに...
あはれに...
あはれに...
あはれに...
あはれに...
あはれに...

十月廿五日 式棒庵興行大軒

題千鳥

写し繪の澎湖啼らん 幸ちと幸 存義

万石の島哉又かくとふとふとふ 祇丞

かまひ祢乃下好園あり小あふを 買明

温泉をあるも涌あつ伊豆好衛が 樓川

禱をくささすまぐちととと 雞石

粒ふとる啼てさといきふるうあ 由林

探題

時雨 江中 生海嵐
坂田 蒲團 大板引

物買ふて京の時雨のやとりうを 李井

分別のうへに遊ぶ江中を如 須臾

ふら底能生海嵐をあまこけ 獨歩

かひくきやまぬるを言ひしつ 木樨

折りてきつ旅人ゆく三布ゆえん 獅子

とむさ著る時等によるぬ大板引 式棒

十月十日

獅子眠興行

題を員頂講

次の間ハ坊々お定そゑいす講 存義

苗天枝花みくしりくゑいと講 祇丞

浪のうへに遊ぶ員頂あり大漆 買明

鯛の智の源ハ色もよゑ員頂講 樓川

三男おろおろむ里や志いす講 申林

腰あけの繩を酒のめをいと講 雞口

標題 巨魁 詠の巻 山景
河豚 夜無引 枯壁

子母めつゝ山猫唄ふ巨魁うね 李井

面舎里苔めぬころや詠せ月 須史

山茶花の盆乃り来や四冬す 獨歩

弘法子毒の歌さゝ河豚汁 木樨

ふ犬子圍成まをよ夜無引 式棒

ゆる月やの表を枯壁の海屋も 獅子

今十月廿日 李井庵興行 李井

題を至

天地の室成ゆ表や冬玉の梅 祇丞

光陰の一里塚又よ冬玉梅 買明

禰林子嘗おそ記を至らる 樓川

冬玉如日えくや初如芽如動き 雞口

冬玉をくやり肺のこゝハ保まてと 曲林

風の例々 他表本の芽式 存義

探題
霜 冬田 紙衣
水柱 槽

雪の神哉いへく蕎麦湯が 須史

冬な〜田始まう〜山道うな 獨歩

空級子え捨〜紙衣が 木樨

釣くの糸や糸笑く蓮の莖 獅子

酔ふめ始いと枝を折る水柱な 弋棒

舎〜衣も槽の白らうな 李井

霜月十日の雪の中 木樨菴興行木樨

題鉢扣 水柱の雪〜 木樨

於惱の火を唱へを神き〜き 存義

瓢箪成方始法里合や鉢多〜記 祇丞

神扣夢めも武士女を始な孝 買明

あ〜い〜成あ〜ゆ〜せ始〜鉢〜き 鶏口

神き〜き〜るやゆけの鳥丸 由林

之君始 善賢とえぬを神た〜哉 樓川

探題

六至 綱代 寒

ぬくも 較 ぬ仙

冬 玉うち目ぬえぬ秋も風とあり

李井

葉ぬ流りて綱代忠魚や赤心里

須史

本津川の人吹きうけむさうま

獨歩

ぬくもをのめ自やちうくさ

獅子

沖中や心斗ぬ向ふ較の法

式棒

ぬ仙や案の初ね申すたつ

木樨

本 霜月廿六日

獨歩菴興行

探題 炭

かゝ松やぬみちを祢つ池田炭

存義

松梅とたぬてあゝ進斗里炭

祇丞

松の戸始待くハ来以炭茂友

樓川

こゝ流ぬく廻て炭やま川里炭

鶏口

炭旁や那智能流流斗不音

曲林

炭山や夢あゝか記のけ鳥

買明

探題 冬籠 火燒 氷

火桶 鴛 空露

きう猿や書かいてるるをこり 李井

才子阿匹栴て庭掃く火焼也 須史

尾鱗もた水子籠の遠いりま 木樨

土性の魂いづつ火桶の如 獅子

鈕羽哉くろみ持や鴛鴦妻 弋棒

木母まの向ふも洗や空念佛 獨歩

十二月十日

須史庵興行

題臘ハ

臘ハみせめく高籠よ軒の笈 存義

臘ハやふおれいづろ音節 買明

臘ハせ初り顔もを解迎る嶽 樓川

臘ハや園の別れをめけの星 雞口

臘ハみ鳩難知や觀無量 由林

臘ハやも登る功の又かゝる 祇丞

題守歳

酒汲むの味もさもさう物忘れ

李井

大くやくは恨まぬ花も川

獨歩

日茂繁く霞あるやもなほ市

木樨

待惜む阿咄も言や年の関

獅子

月宵や田中の家も静ころり

式捧

人あにに不人おなじ師走山

須臾

寶曆五乙亥年正月 李井庵興行

歳旦 太林

色々のほく除福う影也初難煮

祇丞

味も唐巾も吟以美の妻

買明

老子也く算盤くけ是の喜

樓川

青陽也めくう謹越をくく

鶏口

初鐘也冬を控滄耳の底

由林

いままは小櫃をせし里四女は人

存義

探題

海苔 薺 風中
木芽 薺 雪古

法苔海や漁村さくくは法乃る 須臾

二人う三人苔に野老うち 獨歩

罪もなく又ゆるや崎のいぢぢ 木樨

僧正法師の木の芽う那 獅子

まのあや流る音ハ峰の雪 式棒

旅人さきせる紫らん雪百より 李片

正月廿日

獅子賦興行

題蝶

旅駕みいゝまは夢を於際うち 存義

蝶々海陸城帆の坊日和り那 祇丞

蝶々若始うち海紫野 買明

蝶々若葉や紫らん午の貝 樓川

羽ふと二羽あまうての故蝶が 由林

つじ蘇に老もゆつた故蝶うち 雞口

探題

就月 涅槃舎 糸魚
新能 燒野 接木

就月 障子に 影を 何くとも

李井

涅槃舎や 藪の 交母あゆみ

須臾

去る 息と 月は かく 面杖 焚か

獨歩

思ひ 心も 威徳 臥や 雉子の 夢

木樨

燒野 尺る 里に 力や 一色 ぶら ちや

式捧

あき 流し 待候 する 本や まる 子立

獅子

二月十日

式捧庵興行

題 菜花

灰の 屋の 菜の 花乃 咲ゆ 里りり

存義

菜の花 色や 君心 ごとく 全世界

祇丞

菜の 志や 何の 語も 昔の 里

買明

菜乃 花や 長古 四角 子然 する 言

樓川

菜の花 紫雪 知雪 氷色 仙

雞口

菜の花 油も 本然 言く 妙語

由林

探題

田螺 幡 海ノ
徳庵 松 高橋

候ありに蛙の中始多にうら
李井

障の葉や深みたれふより
須臾

海る鳥来る時わきのさむさむ
獨歩

泉臺北峰の寺や徳庵 鐘
木樨

夕く水やぬくこおはる
獅子

しる力あるに柳波笑う入る
弋棒

二月廿六日

木樨庵興行

題花

夕花 系志くし 向戸探寺ありけ
存義

昼花 日もいゝやあつは 跡とよの
祇丞

夜花 花の清き掃て 借ふる
買明

風花 山臥や宮子吹るは 花の老
雞口

朝花 日々の山とたふ来ぬ 向や花の風
由林

雨花 花のしる羅紗の金羽の 東山子
樓川

探題 草紙 鷄合沙干
雛 曲水 枕

佐保唯のわくわくは孝子な餅 李井

魁や自派にまじりあつた鶏 須臾

十里は、東海乃の夕下るを 獨歩

く〜いと好お程光るいいまに 獅子

曲もや根を〜う〜の小盃 式棒

枕笑て四五日迄の夷中うを 木樨

三月十日

獨歩庵興行

題逢日

破もや地まにハ日始 逢さ〜 存義

我室始鳥かそゆる逢日うを 祇丞

日也逢〜〜〜九十九夜の昼 樓川

せめて才我顧よ日始逢き時 雞口

逢き日や唐戸の孔雀今か〜 申林

旅籠屋母さ守りま日始あま〜 買明

探題

山吹 茶摘 山吹 山吹 海棠 山吹 山吹

石女を山吹の面乃舎里々あ 李井

きのおとろ茶法に於くへのむくが 須臾

あ文拭七西二分のそくくが 木樨

狩くてのるや流生の裸や海 獅子

海棠に在くや社子美詩さき 式棒

汲船や暖味の奥あるも北底 獨歩

三月廿六日

須臾庵興行

題牡丹

岩角子くへえぬ簪如牡丹う那 存義

日持あ子巻の巻くつをむが 買明

憎まき縄のけえや白牡丹 樓川

蝶あつ桐子阿婆とのく牡丹はれさう 雞口

二輪とる浮世の欲乃牡丹うま 由林

一輪中牡丹改めくる粟由が 祇丞

標題

杜若 かんきつ舟
短杖 蠟燭 郭云

かきつたる 軽うらましく 田んぼ
ちる 成二羽く 涙を やかん
鼻つまむ 周子 繕 裁 画く 袴舟
みし ねや くの ぬを ぬき 火
りあはるに 繩く 物の手 誥
そつきの や 縁 何 意 あり ほく ぎす

李井 獨歩 木樨 獅子 式棒 須史

三月廿六日

則史 須史

四月十日

李井 慶興行

題堂

石川の ちるを 音曲 持つ 堂
聞き 憂く 堂 於 例 如 朝 日 山
遠く 人 舟 鳴 子 鼓 又 ち 於 堂 なる
朝 六ツ 乃 指 子 かく ち 堂 なる
いと 枝 葉 園 とも 自然 なる 堂 於
夕 暮 舟 羽 の 生 了 也 花 山 堂

祇丞 買明 樓川 鶏口 由林 存義

押題 茶 裕 懶
松 魚 物 牛 幅

つゝちと喰つて茶也靴る山 須史

着うへると竹茂まつえる裕る子 獨歩

懶きれゝ我ある是る天地う物 木樺

釣人小庄の女やうつ松魚 獅子

風小舟吹けあふくはがらう少 式棒

かくちうや行ふの湯を衣へ折 李井

四月廿四日

獅子賦興行

題五月雨

五月雨や夢と思ふ山は山 存義

糸人のさみおれ替る夢うらな 祇丞

あきところおろし自お傘を 買明

さみおれや白日星と写るも来以 樓川

さくくあやうきぬ宵も雪は蓋 由林

橋の幅も流るり傘月 鶏口

探題

柳戸 坂中 繁 故き
葉様 早苗 扇

先喜記柳戸茂る如白いり如 李井

繁々あさきさきは日枝の山法師 須臾

輪も葉茂つくくくくくく 独歩

葉様也室に繁戸くく 河の雲 木樨

あまをいよあは洗き早苗あ 式棒

日に菊ふつまくいあおの扇か 獅子

五月十九日

式棒庵興行

題凡

凡乃葉にかかれて管ふ嵐うあ 存義

抄さま子如抱龍か凡也共葉凡 祇丞

むさく如月鬼いとらや共葉凡 買明

さ子実子ち月乃色や凡さけ 樓川

焚山と知る凡盗人の白いり如 鶏口

修り者凡瓜まいつくさ羽の家 由林

探題

蠅 子乙女 甲
帖 友本之 園扇

邯鄲の蠅多し此時の寐さめり物

李井

子乙女や日如めをえきる孫小僧

須史

蓮生茂然谷みしるかかとうま

獨歩

子川みさかまく船の客里が

木樨

況も一ついさ著連歌や友本之

獅子

飛糸のゆる子都の園扇うま

式棒

五月七日

木樨庵興行

題蓮

拱く物と里顔の蓮又み那

存義

蓮清くくも寐起の溜り声

祇丞

蓮かしく蓮のうへの庵うな

買明

蓮の身や日と咲の月る池の果

樓川

露さくし小実珠み蓮如苔か

鶏口

漆やぬ蓮如こやしや雲衣

由林

探題

蝶 富士詣 白雨
夕魚 清水 牛馬人

春つふは花也蝶のうしろ色 李井

峰あまに四季哉 蝶おりり富士詣 須史

ふゆみまるとも南也 浅間山 獨歩

夕魚やまや魚魚のかちち 木樨

いくいとの新鳥一り清水が 獅子

抵李とのいふは誰か 化己人 牛馬人 式棒

六月十日

獨歩菴興行

題署

町中み法螺吹くあつさうな 存義

草葉まゝ世哉あちちむく暑が 祇丞

日浅さまは自ら記音如阿つさひ 樓川

祇麴みむせくきちさる暑うが 鶏口

去つまりて昼如 障ゆく暑うが 由林

死との猶古して居る暑うが 買明

探題涼

御涼 秋の夕に暮れぬ夜をくすみ

李井

池涼 青の舟もも池のほとけ

須史

湖涼 舟の帆かけて夕涼

木樺

瀧涼 涼居て夜にかく川の流れ

獅子

川涼 舟の河をあらうまら河涼

式棒

海邊涼 舟の七里ある海や夕涼

獨歩

六月廿六日

須史菴興行

題初秋

初秋と秋の夕に門掃く男の舟

存義

初秋の夕舟と夕涼也夜秋刻

買明

夕の秋也片枝の暑記百日の

樓川

夕の秋也と秋の起せし涼是れ一

雞

夕の秋也と秋の起せし涼是れ一

由林

夕の秋也と秋の起せし涼是れ一

祇丞

探題

梶 硯ありい 檀舟并
か袖 立琴 糸糸

下とこみくらの紙や梶のふ 李井

硯石あゝも土佐の海のふ 獨庵

吾竹舟ふんきくおあお 木樨

か寸袖と濡川つゝおあけの彦 獅子

糸るおの夢お龍池のふや 弋棒

おみせん袖ういの糸乃細く 須史

七月九日 李井庵興行

題お撲

夕白み西も東を 曠 ともふ 祇丞

秋の夕暮まう祭りう 角力取 買明

胡延み玉の汗も体お撲う 柳 樓川

弓杖の裸ゆーや 儀とゆふ 雞口

投うあ西のかうや乃 羅漢達 由林

子抱て行司にうや 辻角力 存義

探題

番椒 乾薑 蘇

旁 稻 藁 荻

以 乾 丹 一 つ ま る 草 也 草 加 一

須史

忌 所 儀 之 十 日 始 知 心 止 邪

獨步

蘇 也 夕 了 丹 加 以 小 く 庭 垣

木樨

常 香 丹 旁 短 流 石 撞 樓 子

獅子

的 行 也 稻 一 つ ま 庚 石 筑 波 山

式棒

公 火 丹 也 裏 成 尺 色 以 孝 下 一 子 子

李井

七月廿六日

獅子眠興行

題 題 分

素 山 子 之 丸 ち 死 一 一 理 分 分

存義

為 丹 尺 ぬ 小 山 吹 也 也 理 分 分 邪

祇丞

行 小 丹 香 吹 一 つ け る 理 分 分 子

買明

大 蘇 之 也 憂 丹 也 力 小 ぬ 理 分 分

樓川

夢 ぼ 一 也 理 分 分 也 燈 の 君 ち ち

由林

菅 丹 一 一 果 一 燈 分 分 伏 丹 也

雞口

探題

夜蛤 下り築 秋雨

むら 隆く尸埋之く 卷破式

李井

子く 記也 鴨より 鴨き本始尖リ

須臾

初沙也 月お 射し 波の花

獨庵

配言 記 始の ことより 也 夜を 隔り

本樺

掛く 由る 風 色う あり 下り 築

式棒

椎 乾く 物 如く 秋の 面

獅子

八月十日 式棒庵興行

題放生會

龍門を 渡乃 赤城や 放生會 存義

木色 多し といふ 又 放生會 祇丞

山 板 我 漢 士 乃 焚く 火や 放生會 買明

松 花 堂 へ 往 遊 出 け 放生會 樓川

今 朝 死 一 鳥 へ 啼 せん 放生會 鶏口

糸 ち かく 泥 龜 泣く 放生會 由林

標題

新酒 添水 鷄 葛 蘭 麻

草鞋のまゝ 丹久あゝ新酒が

李井

多のねを 糺つとめさる 派ふが

須史

とねやふ ちりね知や 糺に美

獨歩

我おの秋のまゝ 足よ 休み草

木樨

茶剪し ふうり 蘭の詠めお

獅子

山とや 茶釜黙ア ころ 鹿の声

式棒

八月廿六日

木樨庵興行

題秋暮

魁冠も 手取つと ころり 秋の暮

存義

つ 朧 立て 四方 茂 搜や 秋のころ

祇丞

湖のころ ぬきみ 小あき 秋の夜

買明

秋のころ 水や ころり 師と 才子

雞口

ゆき 居て 待人 じやう 秋の暮

由林

杖子と きて 鞠を 蹴り 秋の暮

樓川

探題

雁 菊 夕宮 夕花

啼くて来たてんあくーや小田の唇

李井

葛の葉を尾枝をを管よ菊は志

須史

飛遠ふ考我梭ゆてかみちり

獨歩

風道み志は〜ときつや菊は露

獅子

初尾本も目にめろくや馬近宮

式棒

あふ子をくあち髪あり花ときき

木樨

九月十日

獨歩庵興行

題后月

撲々の蔓くゆ練や存の自

存義

探幽をいふく〜ん存は自

祇丞

縦より紅葉結菊登十三夜

樓川

ゆ〜ねん存る記信も月の友

雞口

又めはや袖も薫存の〜

由林

〜〜〜と星結ふ〜〜十三夜

買明

探題

柚味噌 稲刈きぬき
蜜柑 末柑 九月

多うまへハ葉も軸も好記柚味噌丸

李井

稲刈とうこくぢうさう浮市堂

須史

とめへ山吹まくり手あしと石丸

木樨

順禮の先一番し蜜柑うま

獅子

棠のうちもう〜枯れり葉荒れ

弋棒

聖とちおの魚えつやん九月

獨歩

九月廿日

須史庵興行

題雪

芦姑葉乃覺快又せり雪の暮

存義

雪成ゆるゆきゆるり雪舟

實明

雪つ雪や大系母も〜る牛姑靴

樓川

初雪や衣きぬ山もきぬあま

雞口

雪つ雪や田面の勢も雪乃抗

由林

雪つ雪や梢も〜る茶の任

祇丞

探題

鴨十夜 出か
芭蕉忌 冬菊 為紫

持多をひりお色をさし鴨如艶

李井

子みあぢさせく十夜の冬えが

獨歩

風や墨波ゆみゆと旅本山

木樨

愚つむや為紫く山の出

獅子

空菊みすさゆきさる星月夜

式棒

深林の掃けともく為紫うま

須臾

百韻

梅既かゝ魁子花咲みりり

李井

戸内ともしせし苔散乃乃

須臾

春亦の旅み言位やきむん

獨歩

酒さげあはみ月人の舞

木樨

庵の額秋心成書流へり

獅子

志々高斜 葉るあふまを

式棒

吟をうも汐しきるり釣の友 須史

こゝに詩くと枕を色なる 李井

問を赤衣流へて貸彦交 木樺

いく暇をちどりの換授 獨歩

君と志き悲れぬる方始因果律 式棒

翠せ庵りるふ安涙こわあく 獅子

羽戦飛ふをちちるふ始古軒母 李井

とくまのけるるのけく首 須史

こゝろを琉球くく色後糸里 獨歩

小判子照く寸秀吉始智魚 木樺

椀飯を篠くつ移くるるめく 獅子

干觸儀子車風吹けり 式棒

深川の急き三くりの幾句塚 須史

観とる眼我鼻成える 李井

秋の夜始古言隠り月冬今 式棒

夢を始水くくる曲瓦の音 獨歩

糧をく為粟のふ首袋

木樨

飛脚追く荒法師在

獅子

吹降の松末つ留戸冬藤色やうし

李井

あ、流の松枝ゆきまおかしら

木樨

あ、ま志のふ乃山の乾兄才

獨歩

結よはなまぬ志ほくき棧

須史

浮け船み河を始夕日走つるる

獅子

あ、今の流み群あ是上燈

式棒

いのちの秤みかゝる市をちて

木樨

状子封きあやま柳會津大黒

李井

は央すくゝ尼と始目鏡穢くみ

須史

さくらく男の梅のうらと記

獅子

而く一芸菰み始新船の流

獨歩

あ、さく惜交佐若子関札

式棒

手如痛く成わとたく二間織

李井

枕くくみ油あいらく

木樨

教生母懲りし母如葉母むせて 獅子

心葉とくくくハ松實まぐ、 須臾

錦本母恒も心離と折長く 式棒

袖の心てえぞ紙子おく、 獨歩

老の心母ハ葉くせぬ花 木樨

火折くつく、葉合ハ露 李井

露月波本如宵母狭むも柳山 須臾

寐能く、面ハの鳥啼く秋 獨歩

對陣乃互に磨く若乃色 式棒

靈芝如く、村の沼 木樨

咲かむむ永子貫如花の林 獅子

三 三三と路中の若如きは、記 須臾

台十みく飯中つく、書と何里 獨歩

塔邊母ハ刻む日、白材木 式棒

あゝ破子破船の始終ハと憂き 李井

列く夷とく、む君 獅子

物かぬ人か戯水一葦子出き 木樨

まくくくめとある。盆持去る音 獨歩

隠居家々四舎め記る焚火し 須臾

猫と鳴る。僕の本也里 李井

くつ鞭よあつ色とくや馬持方 式棒

去高堂子。西高雨うと 木樨

子持そ逢持る思ひも取交る 獅子

優婆塞ふくく。お持お談 須臾

浴きお鹽み。ゆきと月持歌 獨歩

去持魚。涉く。喧刺啼く。音 式棒

秋葉の指持ま。み。足泥く。 李井

志子きゆまぬ老持。金。打 獅子

人形の上。み。み。人。足。感。一。色 木樨

日持の影を。拭け。志持。免 獨歩

中垣に。ある。ほと。成。一。あ。か。め。子 須臾

お持。所。と。さ。く。く。袖。帳 李井

芥生より秋苺芙蓉花急使 式棒

粟扱く子等みよく別り轉 木樨

鍋蓋花壇埭みくくる物如月 李井

考を難み神の火多記登 獅子

還音み翁さしくる武者所 須史

下郎の袖と皆来饗以 木樨

魚みはく鮑の考も庭の隈 式棒

戸垣をさくぬ涅槃の音く 李井

端義少く心垂坊成あるなる里 獅子

箒て掃しやるく古足代衣 獨歩

天秤のむふまろ来る物日新 李井

はあよりしつる櫛乃さるるき 式棒

大名を香籠持と花入る物 木樨

百代たさきおに戸如者開さ 須史

寶曆六兩子春

京堀川錦上町

西村市郎右衛門

西村源六版

書林

江戸本町三丁目

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like 木、林、市、郎、右、衛、門]



[Faint handwritten characters at the bottom left of the page]

